

2023年1月30日

2023年度聖路加国際大学大学院  
看護学研究科課題研究

高齢在宅療養者に対する残存（起居・歩行）機能維持のために訪問看護師による予防的リハビリテーションの実際に関する研究

**A study on the Actual State of Preventive Rehabilitation by Visiting Nurses to Maintain Residual Physical Abilities (Standing, Sitting, Walking) of Elderly Home Care Patients.**

21MN010

川上玲子

## 論文要旨

### I. 目的

訪問看護におけるリハビリテーション（以下、リハビリ）では、看護師ならではの視点で生活環境や今後起こりうる身体機能の課題、潜在的にあるリハビリの必要性に気づき、取り組むことが重要である。そのため、本研究では、高齢在宅療養者に対する残存機能（起居・歩行）機能維持のために訪問看護師による予防的リハビリの実際を明らかにする。

### II. 方法

訪問看護経験3年以上で、起居・歩行が困難な療養者に対し課題を解決できた経験を有する看護師1名にインタビュー調査に基づく質的記述的研究を行った。分析では逐語録を繰り返し読み、文章の意味が読み取れる最小の段落に分け、分析の単位とした。残存機能維持のために訪問看護師による予防的リハビリの実際に焦点を当ててコード化し、コードの共通性を見いだすなかでカテゴリーを抽出し抽象度を上げ、看護過程を枠組みとして当てはまるカテゴリーを整理する。分析においては、指導教員のスーパーバイズを受け、分析の妥当性を確保した。

### III. 結果

【アセスメント】では、病態と照らし合わせ、利用者の状況と残存機能を確認していた。【計画】では、利用者や家族の思い、身体機能のアセスメント結果を反映させた計画を立て、今後を見据え今できることに取り組んでいた。【実践】では、日常生活の起居動作がリハビリとなるよう、環境を整えることや、利用者の生活歴を聞きリハビリに取り入れ、利用者や家族と進捗の共有をしながら進めていた。【評価】では、生活に根差したリハビリの評価を看護師だけでなく、利用者本人や家族も評価ができるよう基準を共有し、繰り返し行っていた。【成果】では、利用者、家族、看護師それぞれの成果があり、利用者は日常生活の一部にリハビリを取り入れることができ、積極的に取り組むことで自分らしさを取り戻すなどがあった。家族にとっては利用者の変化を感じ、安心できたことや、看護師との会話の中で自身の言動を振り返る機会となっていた。看護師はリハビリの関わりから利用者の変化を見てやる気が出た、嬉しいと感じていた。また、この他に【利用者への教育】も実践として行い、看護師によるリハビリを円滑に行うための【組織づくり】【後輩訪問看護師への教育】【他職種との連携】が整理された。

### IV. 結論

訪問看護師は、生活の基本的な動作である起居動作を獲得するために、日常生活の中で行われる動作をリハビリとして実施していた。実施に際しては、目的や目標を利用者と決め、家族の支援を受けながら継続して行えるような支援をし、段階を踏んで機能を獲得していた。また、多職種と一緒に計画立案や評価をし、互いに情報交換しながらリハビリを実施していった。さらに、在宅において需要の高まっているリハビリを一人でも多くの看護師が行うことができるよう、事業所内での研修や指導による教育を図っていた。